

Audio Accessory

2020 SPRING

176

総力特集

福田雅光監修

最新アクセサリ&ケーブル

音質向上バイブル

ウィーン・フィル
ニューイヤー・コンサート
録音現場に潜入!

特別付録
水戸のジャズ喫茶でライブ収録!

至高の現代ジャズ
Cortez サンプラーCD



AA誌の注目記事はWEBでも楽しめます

ドイツ老舗ハイエンドブランドから 強力な中核機2モデルが登場

Text by
井上千岳
Chitake Inoue

Photo by 田代法生



ACCUSTIC ARTS POWER I

プリメインアンプ
¥1,100,000 (税別)

Specifications

<POWER I>●アナログ入力:XLR×2、RCA×3、RCA×1(アンバランス or SURROUND-BYPASS)●アナログ出力:RCA×1(pre-out 47Ω)●ヘッドフォン出力:6.3mm金属ソケット 34Ω●左右信号差:0.4dB以下(0~40dB)●入力抵抗:XLR 50kΩ×2、RCA 50kΩ●パワー出力(THD+N=0.1%):135W/ch(8Ω)、200W/ch(4Ω)●立ち上がり/下がり時間:4.6μs @4Ω●SN比:-97dBA(ref 6.325V)●歪:0.015%●電源トランス:500VA トロイダルコアトランス●ダンピング・ファクター(THD+N):700以上●電源キャパシタンス:54,000μF●消費電力:約60W(無負荷)●サイズ:482W×145H×430Dmm●重量:約22kg●取り扱い:(株)ハイ・ファイ・ジャパン

BEST HiFi Components

2020 SPRING

Profile : ドイツの著名ハイエンドブランドであるACCUSTIC ARTS(アコースティック・アーツ)のTOP Seriesに、CDプレーヤーとプリメインアンプの新製品が登場した。「PLAYER I」は、独自開発のDAコンバーターを搭載し、384kHz/32bit対応のUSB入力を装備するCDプレーヤー。「POWER I」は12個のバイポーラ・トランジスターを出力素子に採用したプリメインアンプ。両機とも筐体の強化と、新たな世代番号で刷新された。

Specifications

<PLAYER I> ●再生フォーマット:CD、CD-R、CD-RW ●アナログ出力: XLR(47Ω×2)、RCA(47Ω) ●デジタル入力:RCA同軸×2、光TOS、USB2.0 ●デジタル出力:RCA、光TOS ●入力データ:ハイレゾオーディオ 192kHz/24bit(ALAC、FLAC、AIFF、WAV等)、DSD 128 ●DAC: 384kHz/32bit アップサンプリング ●歪(THD+N):0.01% ●クロストーク: <100dB with digital 0dB ●サイズ:482W×130H×380mm ●質量: 12kg

ACCUSTIC ARTS PLAYER I

CDプレーヤー
¥1,100,000(税別)



● PLAYER Iの概要を知る
電磁シールドに完璧を期した構造を採用



PLAYER Iの背面部。アナログ出力はRCAとXLRを装備。デジタル入力はRCA同軸×2、光トス、USBを装備する



PLAYER Iの付属リモコン。POWER Iのボリューム操作も可能



POWER Iの背面部。アナログ入力はRCA×3とXLR×2を装備する。スピーカー出力端子は1系統

アコースティック・アーツのラインアップは、スタンダードなTOPシリーズと上位のREFERENCEシリーズで構成されている。そしていままではMk1、Mk2という世代番号が付されていたが、今回からこれを廃止して単純にPLAYER I、POWER Iという形にしたという。

どうやら単なるリファインではなく、大幅なりニューアルでラインアップの一新を図ったということだ。トップパネルにロゴマークの深い切り込みを入れたデザインはその象徴のようにも見える。因みにPOWER Iは世代としては第5世代に当たる。せっかくなので両機別々に紹介したうえで、最後に組み合わせで聴いてみることにしたい。まずPLAYER Iである。

ドライブメカは上位機とは違ってトレイローディングとし、DA変換は384kHz/32ビットへのアップサンプリングで行っている。同軸/USBのデジタル入力も備え、別々のDACが搭載された贅沢な構成だ。なおPCからの入力

アコースティック・アーツが手がける 上質なオーディオ・ソースの魅力

アコースティック・アーツを主宰・経営するシユンク兄弟の一人シユテフエン・シユンク氏は録音エンジニアでもあり、社内にはミキシング・コンソールその他の機材を備えたスタジオも装備されている。同社の第一号機がスタジオ用のモニター・スピーカーであったのも、それと無関係ではない。

このことから分かるようにアコースティック・アーツという会社は音楽そのものへの関心が高く、既存のソフトに飽き足らなかつたのかある時期からオリジナルのCDを発売するようになった。「UNCOMPRESSED WORLD」 というタイトルで、現在VOL・Vまでがリリースされている。

性ヴォーカル、女性ヴォーカル、ピアノ、サキソフォンという具合に1枚ごとにテーマが設定されている。

またトロンボーン奏者JOE GALLARDOの『BLUE MINOR』という新譜がVOL・VIとして昨年発売されたが、これはオリジナル録音のようである。

このほかLPも2枚発売になった。CDのVOL・IIとVOL・IIIつまり女性および男性ヴォーカルのアルバムである。

が破綻し、時には機械そのものが壊れてしまうからだ。オーディオファイルにとつてみれば残念なこと、こうした制約を取り払って音楽そのもののレンジを元のままの広い状態でリスナーに届けたいというのが、このシリーズのコンセプトなのである。

タイトルのとおり、それを聴いてもダイナミック・レンジの広さが特徴的だ。一般の市販ソフトでは様々な再生シーンに対応するため、リミッターをかけてレベル抑えたり一定以下の低域をカットしたりといった操作を加えることが多い。でないと貧弱な機器では音

かなナンバーの多いディスクでも、深く沈んだ低音が意外なほどどっしりと聴こえてくる。一方でサククスなどは無暗にパワーを利かせたのではなく、ディテールまで丁寧に拾い上げて生の空気感まで感じさせる仕組みになっている。

いずれもレンジの余裕から生まれるもので、それはアナログLPでも同じだ。上質のオーディオ・ソースとしてぜひ注目してほしい。

いずれも音源は他社のものだが、それをリマスターしたものが、男

（井上千岳）



『UNCOMPRESSED WORLD Vol. I』(CD)



『UNCOMPRESSED WORLD Vol. II』
CD/LP2枚組



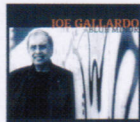
『UNCOMPRESSED WORLD Vol. III』
CD/LP2枚組



『UNCOMPRESSED WORLD Vol. IV』
(CD)



『UNCOMPRESSED WORLD Vol. V』
(CD)



『Blue Minor/Joe Gallard』(CD)

価格 CD ¥8,000/
LP2枚組 ¥11,000(各税別)

音楽がしみじみと耳にしみ入ってくる こういふ再現はなかなか経験できない

には、専用のドライバーも用意されている。電源はトロイダル・トランス2基と大容量コンデンサーで形成し、デジタル部、DAC部などに4分割して供給する。ハウジングはオールメタルで、電磁シールドに完璧を期した構造である。

付帯音がなく、くつきりと骨格の強い鳴り方をする。ピアノのタッチにじみがなく、低音部をがっしりと把握して明快そのものなのが第一に印象に残る。高域にもその感触が持ち込まれ、全体が強靱なテンションの利いた弾力に彩られている。フォルテの瞬発力など怖いくらいだが、それについて金属的な硬質感はなく、弱音部では

ディテールがきめ細かく描かれてニュアンス豊かな再現を展開する。とはいえ、ここでも明晰さは貫かれ、どこまでも見通しがはつきりして曇りが無い。

マドリガルはその精細感が隔々まで行き渡り、一人一人の声がい

れ以上ないほどはつきりと分離してそれぞれの表情が豊かだ。空間も遠近に富み、位置感がばやけな

い。ピントがよいのだ。オーケストラはいっそう音場が目に見えるようにリアルだ。立ち上がりが見えの言うまでもないが、そこにエネルギーがたっぷり供給されているため強弱の出方が大きいのである。起伏が幅広く生命力に溢れて演奏が生き生きと描かれる。明快さとエネルギー。それが本機の本質と思っている。

●POWER Iの概要を知る 逡巡がなくどんな音も滞りなく出てくる

POWER Iは出力に12個のバイポーラ・トランジスタを使用。500VAのトロイダル・トランスを電源とし、135W×2/8Ωの出力を得ている。プリ部とパワー部のLRそれぞれに別巻き線とし、電源コンデンサーは54

000μFの容量を持つ。ダンピング・ファクターは700以上に達し、やはりメタルハウジングで電磁シールドを強化した構成だ。

緩急自在というべきか、ダイナミズムが広いのか、逡巡がなくどんな音も滞りなく出てくる印象がある。スピードが速いのは確かだが、それに強弱の凹凸がびつたり追いついていない感覚だ。

ピアノは輪郭が明確で濁りがなく、上から下までエネルギーに満ちている。フォルテの強靱さは言うまでもなく、弱音部でも音が痩せず肉質感が高い。それだけニュアンスの彫りが深く表情が緻密だ。

マドリガルは空間の中に取り込まれてしまったようなリアリティを感じる。声楽に実在感と柔軟にうねるような表情の流れが、生々しい手触りを実感させるのである。オーケストラな鮮度が高く、楽器それぞれの立ち上がりがいっそう瑞々しく感じられる。フォルテ

のエネルギーが頭打ちにならずいくらでも出てくるように豊かなのが利いているが、凹凸の変化が速く滑らかできめ細かなものになっている。そこが単なるハイパワーとの著しい違いなのである。

●両機の音に触れる にじみや曇りとは無縁で曖昧さがどこにもない

さてこれで個々の音は分かったので、組み合わせで聴いてみることにする。基本的にはアンプの豊かなエネルギー変化に、CDプレーヤーの骨格の強さが乗ったものと考えていい。

ピアノは想像どおりで、最初に触れたように明快そのものだ。にじみや曇りとは無縁で、曖昧さがどこにもない。低音部に注目してみると。普段より一回り低いところまで鋼のように強靱なタッチが伸びている。決して強引に押し出した力ではなく、ひとりでに深い

ところまで沈んで力感がこもっている出方だが、アンプのエネルギー供給力が利いているのは明らかだ。弱音部でもデリカシーに富んでいるが、肉質感が生々しいのはそのためである。

マドリガルは力強さを通り越して、自然そのものの軽さを備えている。風が吹き抜けるようなソプラノのハーモニーが何のてらいもなくさらりと出てしかもニュアンスに溢れているのは、S/Nの高さも大いに関係しているに違いない。音楽がしみじみと耳にしみ入ってくるよう、こういう再現はなかなか経験できるものではない。

オーケストラはまず音場の深さ広さをはつきりと感じる。まるで目に見えるような存在感で、解像度と位相の正確さを裏つけるものと言っている。そして先にも述べたエネルギーの豊かな乗り方とその変化の自在さ。これが立ち上がりの速さと結びついて、表現の幅が幾倍にも増したようにさえ感じられるのだ。鮮度の高さも利いている。唸らされる……というのは正確ではない。実はその前に、すっかり聴き入ってしまったというのが正直なところなのである。



Finest Music Components
Handmade in Germany

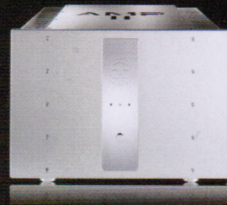
フルラインアップまで拡大したアコースティック・アーツのリファレンスラインを
最上の組み合わせで実演！

ダイナミックオーディオならびにユーオーディオでご試聴いただけます。

DYNAMIC AUDIO

7F

AMP III
TUBE PREAMP II
TUBE DAC II
DRIVE II
RACK II



「しなやかな切れ味」

DYNAMIC AUDIO

6F

MONO III + BASE
TUBE PREAMP II
TUBE DAC II
TUBE PHONO II
DRIVE II



「意外な温もり」

DYNAMIC AUDIO

4F

AMP III
TUBE PREAMP II
PLAYER II
PLAYER ES

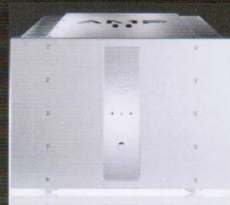


「やさしい音」

U-AUDIO

U-AUDIO

TUBE PREAMP II
AMP II



「ストレートな存在感」

株式会社 ハイ・ファイ・ジャパン

〒102-0075 東京都千代田区三番町1-8

tel: 03-3288-5231 fax: 03-3288-5233

www.accusticarts.com / www.hifjapan.co.jp